

## 「成長支援第一主義」を掲げて



中島 三千男

(神奈川大学 学長)

### はじめに

今日、日本の大学は構造的改革ともいうべき大きな転換期を迎えております。いうまでもなくその背景には三つの要因が指摘されております。一つは四年制大学への進学率が五〇%を超え、大学はいわゆるエリートを養成するところではなく、「二一世紀型の市民」を幅広く養成するところになったということです。二つ目は、グローバル化の進展により、日本の大学も世界の大学と共通の基準（通用性・互換性）を持たなくてはならなくなつたということです。そして三つ目は、これまで大学が伝統的に担ってきた研究、教育という二つの機能に加えて社会貢献・地域貢献という機能があらたに付け加わつたことです。各大学はそれぞれの歴史や伝統、地域性を踏まえて、こうした三つの要因を背景とした大学の構造的改革を迫られています。本稿では近代日本にあつて高等教育機関の整備の第二期、昭和期（一九二八年、昭和三年）に創立の歴史を持ち、首都圏にある、いわゆる中堅の総合大学としての道を歩んできた神奈川大学の近年の改革について紹介したいと思います。

## 改革の二つの方向性

本学も、ここ数年、こうした時代の進展に即応した改革を実施してまいりましたが、この改革の方向性は次の二つの方向で進めております。

一つは、例えば、二〇〇六年から新たな初年次教育として「FYS」（ファースト・イヤー・セミナー）を、またキャリア教育として、「キャリア形成」科目（二年次から三年次）という新しい授業科目を全学的に導入しました。これらは入学してくる学生層の多様化に対応したもので、入学してきた学生が学修を含めた大学生活を立派に乗り切れるように、いわば「全体的な底上げ」をしようというものでした。

もう一つは、こうした、いわゆる「全体的な底上げ」だけではなく、「成績上位者」、「意欲のある」学生にも手厚くサポートし、大きく成長させる仕組みもいくつか作りました。例えば、二〇〇八年からは学部学生の大学院科目の早期履修制度を始めました。また、同じく二〇〇八年度より、海外インターシップ制度を導入しました。これは国内のインターシップと異なり、一ヶ月あるいは二ヶ月という比較的長期の研修です。さらには今年度から副専攻制度もスタートしました。これらに関係した学生の成長が、全体の学生の励み、模範となり、結果的に全ての学生の成長をもたらすというものです。

## 「二〇歳前後の若者は無限の可能性を持つ」

このような二つの方向性をもった教育改革を貫いている理念は、「二〇歳前後の若者は無限の可能性を持つ」、「大学進学時の成績が将来を決めるのではなく、大学に入ってから四年間の教授陣の教育力と本人の努力がその学生の生涯を決める」というものです。大学での教授陣の情熱的な教育と学生自身の努力がしっかりとかみ合ったとき、ぶつかり合い火花を散らしたとき、学生本人も想像しなかったような大きな世界が開かれる可能性がある、学生本人も想像しなかったような能力・才能が開花する可能性がある、ということです。二〇〇六年に新しく神奈川大学のコンセプトとして定めました「約束します成長力―成長支援第一主義」とはこのような事を含意しております。今の若者は、特に大都市圏の若者がそうですが、小さい時から数次にわたる受験

競争の中で、大学に進学して来た時には、自分の「分」をわきまえ、大きな夢、大きな目標を持たなくなっています。こうした若者の気持ちをどのように切り替えるのか、大学教育の中で一番肝心なことだと考えています。

### 創立者 米田吉盛

本学の、こうした教育理念は近年になって考えだされたものではなく、実は本学が創立以来、脈々として受け継いできたものです。本学は戦前・戦後に四期一〇年余にわたって国会議員を務め、また戦後、初の私立大学連合体である、日本私立大学協会の結成に参画し一九五〇年にはその副会長を務めた、米田吉盛という人によって、一九二八（昭和三）年、横浜学院として創立され、翌年旧制の専門学校・横浜専門学校に移行し高等教育機関としての歩みを始めました。米田先生自身、経済的にも家庭的にも恵まれず、尋常小学校を卒業すると、すぐに京都に丁稚奉公し、米田先生が勉学の志を立てたのは、二〇歳を過ぎてからで、二三歳で旧制中学校に入り、大学に入ったのは二六歳の時でした。そして、一九歳で自分と同じように経済的には恵まれないが、向学心に燃える若者のために、夜間の高等教育機関を作ろうと発意して作ったのが横浜学院でした。夜間に学ぶ学生は様々なハンディキャップを持っていますが、優秀な教授陣を招聘し、そうした若者に他の大学・専門学校に、また昼間部（一部）の学生にひけをとらない教育を展開し、これに応えた学生の努力ともあいまって、有為な学生を数多く社会に送り出しました。本学の卒業生は二十万人余であり、この数は全国の大学の中で十五番目ぐらいに位置していますが、日本国内のみならず世界の各地で活躍しています。本学の教育理念、「二〇歳代の若者は無限の可能性を持つ」は、頭の中で、書物から学んだ教育理念ではなく、創立者自身の体験の中から、血肉から生み出されたものなのです。

### 米田吉盛教育奨学金の創設

こうした学生の成長支援を支える一助として、本年から始まった米田吉盛教育奨学金について紹介したいと

思います。本学の試験制度に給費生試験と言う独自の制度があることは有名ですが、これは本学の創立者米田吉盛先生が自らの生い立ちから、貧しくても向学心溢れる学生を救済するために、一九三三（昭和八）年に始めた歴史のある制度です。こうした伝統をいまの時代により発展させるべく、本年四月より「米田吉盛教育奨学金」制度が始まりました。これまでの、額にして一・七倍、人数にして二倍もの給費型奨学金制度の大幅な拡充です。この奨学金の特色は、従来の「経済的格差を教育格差に及ぼしてはならない」という経済的支援だけではなく、先の教育改革の二つの方向性の後者、すなわち、意欲ある、伸びようとする学生の支援という側面も持たせたことです。この成長支援の奨学金として「自己実現・成長支援奨学金」（学術・文芸・スポーツ等の活躍）、「指定資格取得・進路支援奨学金」（公認会計士、国家公務員I種、TOEIC高得点等）、「海外活動支援奨学金」（海外語学研修・交換留学等）、「研究・社会活動支援奨学金」等がそれです。

### 一〇〇周年に向けた将来構想

また、本学の教育理念に基づく諸改革を体系的に実現し、二〇年後の一〇〇周年を迎える頃には本学が日本の高等教育機関・大学の中で今よりも一層、名誉と責任のある大学になるべく、二〇〇八年、創立八〇周年を機に「学校法人神奈川大学将来構想」を策定し、本年四月にはそれをより具体的に進めるべく二〇一〇年から二〇一五年の六年間に実行すべき「同中期実行計画」を策定しました。大学部門としては大項目「一 入学後の学修・進路の柔軟性の保証」から「一〇 自己点検・評価、認証評価を踏まえた改善」までの一つひとつについて、中期的（六年間）に実現すべき課題、一〇〇課題にも上る事項について、その実施時期を含めて策定しました。この中には、学部・学科レベルにおける理念・目的の策定や三つのポリシーに基づくコア科目の見直し・厳選を含む体系的カリキュラムの編成、「内部質保証」システムの構築など、いま日本の大学で課題となっている、学士課程教育の構築に向けた多くの課題がもりこまれていきます。今後は、この「中期実行計画」を指針として、スピード感をもった大学改革を進めて行くこととなります。